

# 日本在宅 医学 会誌

Vol.16 No.1

## The Japanese Academy of Home Care Physicians

●巻頭言			
「地域包括ケア推進」が急展開する中での本学会の役割について	前田 憲志	1	
●原著			
「在宅医療介護従事者における顔の見える関係評価尺度」の適切性の検討	福井小紀子	5	
●報告			
地域密着型市中病院での緩和ケアチーム活動による院内の緩和医療の変化と在宅医療とのスムーズな連携	大村 孝志, 岡崎 賀美, 稲田 泉	13	
在宅末期がん患者と主介護者に対する熟達した在宅医師の初診時の説明内容に関する定性的研究	千葉 宏毅, 尾形 倫明, 伊藤 道哉, 金子さゆり	21	
一過疎町における訪問診療対象者の日常生活動作および認知機能等に関する概況調査	大西 丈二, 古里 綾佳, 山添 尚久, 小島 照司, 関岡 清次	27	
●短報			
遠隔監視型カメラ使用による在宅医療応用の利点について	隈井 知之	31	
●第16回大会報告 代表理事講演			
「地域包括ケア」構築・推進における日本在宅医学会の役割	前田 憲志	35	
●第16回大会報告 大会長講演			
在宅医療—日本の未来への道標—	小野 宏志	37	
在宅医療における浜松宣言	小野 宏志	39	
●特別講演			
在宅ケアと国際生活機能分類 (ICF)	川島孝一郎	41	
死ぬことと、生きることは同じ—夫・金子哲雄の闘病と死に併走して—	金子 稚子	43	
●教育講演			
在宅医療に歯科はどこまで関われるのか？ 関わるのか！—生きるための食支援がどこまで可能性を持っているのか—	原 龍馬	45	
現場実践に活かす「臨床倫理」の考え方—終末期医療における緊急時対応を中心とした「地域連携」の構築—	板井孝吉郎	48	
かかりつけ医の在宅医療—超高齢社会 私たちのミッション—	太田 秀樹	49	
在宅医療におけるEBM構築のための研究方法	森田 達也	50	
●シンポジウム			
平原佐斗司, 遠矢純一郎, 小宮山恵美, 大谷るみ子, 木下 寛也, 茅根 義和, 井上真一郎, 竹内 文一, 古賀 晴美, 倉持 雅代, 青木 茂, 石垣 泰則, 西村 周三, 横倉 義武, 唐澤 剛, 前田 憲志, 永井 康徳, 紅谷 浩之, 市橋 亮一, 川越 正平, 田中 滋, 堀田 聡子, 小笠原文雄, 森 清, 長尾 和宏, 徳田 英弘, 鈴木 央, 松下 明, 英 裕雄, 土橋 正彦, 平原 優美, 前田 浩利, 田村 正徳, 梶原 厚子, 中村 知夫, 大石 善也, 渡邊由紀子, 高崎 美幸, 和田 和江, 川島孝一郎, 小山 剛, 江島 裕子, 橋本 睦美, 丸山久美子, 山田 健弘, 小澤 竹俊, 和田 忠志, 藤田 拓司, 荒木 庸輔, 金子 秀平, 宮森 正, 岡村 新一, 三浦 久幸, 泰川 恵吾, 望月 崇紘, 住友 和弘, 次田 展之, 小野沢 滋, 井上 健朗, 松岡 明美, 田村 里子, 洪 英在, 金沢 英哲, 金子 康彦, 藤井 航, 石黒 幸枝, 白髭 豊, 加藤 雅志, 森田 達也, 大石 愛, 関根 龍一, 安中 正和, 古屋 聡, 寺田 尚弘, 齊藤 稔哲, 浜野 淳, 加納 麻子, 荒井 康之, 扶橋 由起, 山本 誠, 福井小紀子			
お詫びと訂正	165	日本在宅医学会誌投稿規定	166
投稿承諾書	167	連絡票	168
編集後記	171		

## 「地域包括ケア推進」が急展開する中での 本学会の役割について

日本在宅医学会 代表理事 前田 憲 志

2012年には「地域包括ケア」推進のため、全国105箇所で開催事業が行われ、2013年には、「地域医療再生基金」を活用して、全国各地域に「市町村単位で地域包括ケアを展開するための推進事業」が実施され、在宅医療・介護連携の推進を図るべく「介護保険制度改正」が検討されています。また、在宅医療・介護の連携推進のため、「医療計画の見直し」「地域ケア会議の充実」「生活支援の充実」「介護予防の推進」など、在宅医療を中心として、「医療・介護・生活支援制度」の急速な変革が展開されようとしています。これに伴い、在宅医療を取り巻く環境も大きく変革することが求められています。この大変革も在宅医療に携わる人々を中心となって、受益者の立場を尊重し、高齢化社会に適した形に社会の機能を作り上げていかねばなりません。そのためには、種々の職能の方々の参加が必要となりますが、医療者が受益者の代弁者としてリーダーシップをとり、各地域の特性に応じた地域包括ケア方式づくりに参画することが求められています。

拠点事業の成果の一つとして「かかりつけ医機能の中に在宅医療は当然含まれる」ので、「原則全員参加で在宅医療に参画するが、同時に強力な支援体制の構築が必要である」との合意が得られた地区医師会と行政も生まれています。多数の「かかりつけ医」が参加し、在宅医療の面展開が図られることは望まれる姿ではありますが、「各地域に応じた強力な支援体制作り」が不可欠であります。この支援体制づくりには在宅医療に精通し、多面的な能力を身につけたリーダーが不可欠であり、本学会の専門医は「ポートフォリオ学習」等多面的な対応能力を身につけており、各地区でのリーダーとして活動するとともに、更に多くの専門医の養成を急ピッチで進めていかねばなりません。また、全国での面展開を促進する上においても、支部組織の構築、地区別の支援体制のありかたの抽出等を進めねばなりません。

同時に、新しい学問体系としての在宅医療を中心とした「地域包括ケア学」構築に向けて、「データベース構築」に着手しなければなりません。更に、「支える医療・医学」の体系を構築するには、「堅剛性と対比した脆弱性に関する総合的な研究」を研究機関等とも連携して総合的に進めて行かねばなりません。このような状況のもと、第16回日本在宅医学会大会が浜松市において、「在宅医療 日本の未来への道標」をメインテーマとして開催されました。小野宏志大会長はじめ、関連の皆様方の並々ならぬご尽力により、飛躍的な成果を得ることが出来ました。今大会の記録は本号に収載されていますが、「2025年、2050年問題を徹底討論する」など、まさに未来への方向性を指し示すエポックメイキングな大会であったと存じます。「地域包括ケア」は限られた時間の中で、「基礎」「臨床」「生活整備」「社会制度の変革」など広大な課題に対する検討・推進が求められています。「高齢社会対策」として世界のモデルとして発信して行くためには、「志」の高い多様な方々が叡智を出し合い、切磋琢磨し、改良・改善し、作り上げていかねばなりません。本学会にも多くの方々が入会され、力を合わせて難問解決に当たって頂く事を切望するものであります。